徳洲会グループ
TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP

発行
一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL：03-3262-3133

制作
一般社団法人徳洲会　広報部
TEL：03-3288-5580　FAX：03-3263-8125
Email：news@tokushukai.jp

ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

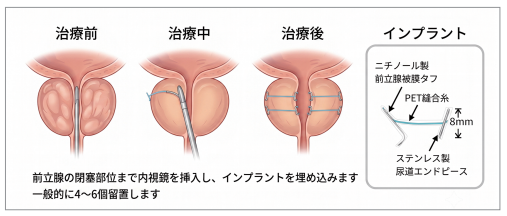
No.1562

前立腺肥大症に対する新たな低侵襲手術
「ウロリフト」沖縄県で初めて実施
南部徳洲会病院

南部徳洲会病院（沖縄県）は８月12日、前立腺肥大症に対する治療「ウロリフト」（経尿道的前立腺吊り上げ術）を実施した。沖縄県で初。同術式は侵襲が少ないため、従来法では手術が難しい高齢患者さんや併存疾患のある患者さんの治療の選択肢になる。一般的な泌尿器科用内視鏡（膀胱尿道鏡）設備があれば導入できる点も強みで、都市部と比べ専門医や高度・大型設備をそろえにくい離島・へき地医療との相性が良いのも特徴だ。徳洲会グループで実施施設が増えつつある。


9月9日にはウロリフト2症例目を実施。治療は15分程度で終了


「多くの患者さんの負担軽減やQOL向上をサポートしたい」と吉岡医師



ウロリフトの手技に要する時間は20分程度

前立腺は、膀胱のすぐ下にあり尿道を取り囲む臓器。この前立腺が加齢とともに大きくなって尿道を圧迫し、頻尿や残尿感といった排尿障害を来す病気が前立腺肥大症だ。80代男性では8割以上に見られるとされ、高齢化が進むなかで患者さんが増えている。

一般的に、治療は薬物療法となり、十分に改善しなければ手術を検討する。手術には、長らく主流となっているTURP（経尿道的前立腺切除術）や、レーザー手術などがあるが、前立腺組織を切除したり蒸散（焼灼）したりするため、出血量増加や尿失禁といったさまざまなリスク、さらに入院期間の長さや術後も再肥大に備え長期にわたり尿道カテーテル（管）を留置するなど、負担があった。勃起や射精など性機能に影響が及ぶ可能性もあり、患者さんが治療をためらう一因にもなっていた。

ウロリフトは2022年に保険適用された比較的新しい治療法。膀胱尿道鏡と専用のデバイスでインプラント（体内に埋め込む人工材料や部品）を肥大した左右の組織に運び、吊り上げることで尿道を物理的に押し広げる。手技そのものに要する時間は20分程度。前立腺組織の切除や蒸散（焼灼）などは行わないため、従前の手術よりも出血や尿失禁といったリスクは少ない。

性機能を温存しやすいのも利点のひとつだ。入院期間も、術後の状態によるがTURPが1週間ほどだったのに対し、ウロリフトは1泊2日ほど。尿道カテーテルも基本的に手術翌日に抜去するなど、患者さんのQOL（生活の質）向上も期待できる。ウロリフト直後の合併症として、排尿時の違和感や頻尿、尿意切迫感などが挙げられているものの、多くは自然と改善する。

徳洲会グループ内で広がり

南部徳洲会病院は、吉岡拓哉・泌尿器科医師が7月頃にウロリフト導入に向け、向山秀樹・副院長兼泌尿器科主任部長ら同科医師と準備を開始、8月12日に初症例を実施した。吉岡医師が執刀し、9月9日には2例目を手がけた。いずれも高齢の患者さんで、経過は順調だ。

「当院には、年齢や複数の持病を理由に従来の切除手術が難しい方、あるいは従来の手術を受けて尿道カテーテルを長期にわたって留置している患者さんが少なくありません。患者さんの負担軽減や生活の質向上を実現したいと考え、ウロリフトの導入を決めました」（吉岡医師）

吉岡医師は「本土に比べ、沖縄県は前立腺肥大症に対する低侵襲手術の選択肢は限られているのが現状」と指摘し、ウロリフトの導入しやすさを強調する。

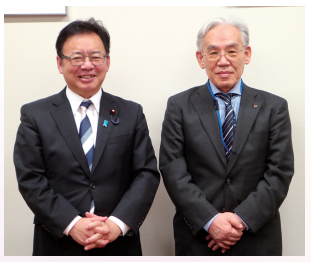
「他の低侵襲手術に比べウロリフトは機器が小型。手技の習得も、TURPなどは技術が安定するまでに50例ほどの経験が必要と言われていますが、ウロリフトは専用デバイスの製造・販売業者による事前のeラーニングと約2時間の実技講習、1例目から15例目までの立ち会いで、基本的にはインプラントを打つ位置が押さえられるようになります」と吉岡医師。

導入のハードルが低いウロリフトは、都市部に比べ専門医や高度な機器を確保しにくい離島・へき地の医療とも相性が良いと言え、徳洲会グループでも導入が広がっている。

徳洲会グループのウロリフト実施施設（9月25日時点）

札幌真駒内病院
羽生総合病院（埼玉県）
野田総合病院（千葉県）
成田富里徳洲会病院（千葉県）
武蔵野徳洲会病院（東京都）
茅ヶ崎徳洲会病院（神奈川県）
榛原総合病院（静岡県）
野崎徳洲会病院（大阪府）
岸和田徳洲会病院（大阪府）
生駒市立病院（奈良県）
出雲徳洲会病院（島根県）
鹿児島徳洲会病院
徳之島徳洲会病院（鹿児島県）
南部徳洲会病院（沖縄県）

東上理事長が上野厚労相と会談
「目の前の患者さんにベスト尽くす」
国際医療協力やTMATなども紹介


東上理事長（右）と上野厚労相が会談後に記念撮影

東上震一・医療法人徳洲会理事長（一般社団法人徳洲会理事長）は9月18日、東京・永田町の議員会館で上野 賢一郎・厚生労働相と会談した。冒頭、東上理事長はグループの原点に触れ、「医療は目先の利益や利権にとらわれることなく、目の前の患者さんのためにベストを尽くすという初心に立ち返ることが重要です」と、患者中心の医療の重要性を強調した。

また、インドネシアで建設中の「ハラパンキタ・徳洲会循環器病センター」など近年、力を入れている国際医療協力の現状についても言及。「海外への医療支援でも、現地のニーズに寄り添い、現地の医療従事者と協力しながら支援を続けています」と、持続可能な国際貢献の重要性を説明した。さらに、大規模災害への対応力強化に関し、NPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）に対する支援や、救急医療体制の整備を今後も着実に進めていく方針を伝えた。

これに対し、上野厚労相は徳洲会の多角的な取り組みに深い理解を示し、地域の安心・安全を守る医療提供体制の維持と、さらなる充実に期待を寄せた。また、上野厚労相からの「他の医療グループとの違いは何ですか」との問いに対し、東上理事長は「単に利益を求めないことです」と即答。徳洲会は営利的な構造をもたず、医業の結果として得られた利益をすべて、現場の環境整備や患者さんに還元してきた経緯を示した。

徳洲会は今後も“生命だけは平等だ”の理念の下、質の高い医療の提供と地域社会への貢献を果たし、真に患者さんに寄り添う医療の実現へ邁進していく構えだ。

「大腸がん」テーマに市民公開講座
石垣島病院&かりゆし病院などが開催


「40歳以上は年1回の検診を」と内間・主任部長

石垣島徳洲会病院（沖縄県）とかりゆし病院（同）は8月15日、石垣市、沖縄県立八重山病院と「第4回医療に関する市民公開講座」を共催した。八重山地区医師会が後援。昨年度から石垣島内3病院と市が共同し年2回、疾病予防などのため開催している。今回は大腸がんがテーマで、島民の方々など約100人が来場し盛況だった。

冒頭、中山義隆・石垣市長と宮良長治・八重山地区医師会長が開会挨拶。続いて中部徳洲会病院（同）の内間恭武・消化器外科主任部長が「早く見つかれば怖くない、大腸がんのお話」と題して基調講演を行った。

罹患数・死亡数ともに大腸がんは上位でありながら、検診受診率が低い現状を指摘し、「早期に発見できれば9割以上は治せます」と検診受診の重要性を訴えた。ロボット支援手術の登場など術式の進化や薬物療法など治療法も説明した。この後、かりゆし病院の伊舎堂奈津子・管理栄養士など多職種がそれぞれの視点で大腸がん予防に関して発表を行い閉会した。

石垣島病院の小畑慎也院長は「『症状がないから大丈夫』ではなく、症状がないうちに検査を受けることが何より大切だとお伝えしたく、今回このテーマを選びました。八重山地域の方々にひとりでも多く検診を受けていただき、早期発見・治療につながればと考えています」と呼びかけている。

榛原病院のフランシア家庭医療科職員
6カ国語を操る医療通訳が好評!!


「互いの文化を尊重し、つながり合う関係を築くことが大切です」とフランシア職員

榛原総合病院（静岡県）のフランシア・イヴォン・カンポス・チンチア家庭医療科（医療通訳）職員が、外国人患者さんから好評を得ている。スペイン語や英語、ポルトガル語、日本語など6カ国語を使い分け、外来診療への同席、手術前の説明、検査・入院手続きの案内などを行う。母国コロンビアの医師免許を取得しているため、医療に関する専門的な情報や特有の表現も円滑に意思疎通することが可能だ。

静岡県が運営する外国人向け生活支援施設とも密に連携し、外国人からの電話やメールでの相談にも対応。フランシア職員は「医療制度の仕組みやメリットを含め、丁寧に説明し、病院と患者さんの認識のずれをなくすよう心がけています」と強調する。

来日は2007年。大学の博士課程で日本語や、公衆衛生、予防医学を中心に学んだ。そのなかで、災害医療に従事するNPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）を知り、その母体の徳洲会グループに関心をもつとともに外国人が多い地域でもあることから、同課程を修了した13年、同院に入職した。


ベネズエラ地震では通訳を務めながら、患者さんの心のケアにもひと役

TMAT隊員の資格も有し、6月のベネズエラ地震では医師兼ロジスティシャン（後方支援・現地調整員）として派遣。現地で通訳を務めながら、患者さんの心のケアにも、ひと役買った。現在は同院に勤務しながら、日本の医師国家試験合格を目指している。

直言

徳洲会グループの新たな“飛躍”に向けて 持続的成長と未来を切り拓く多角的戦略

5つの施策の有機的な連携・循環が成功の鍵



医療法人徳洲会 理事長
一般社団法人徳洲会 理事長
東上震一（ひがしうえ しんいち）

徳洲会が次なる成長ステージへ成長するためには、創設以来の旗印である“生命だけは平等だ”、「生命を安心して預けられる病院」の理念を、持続可能なシステムとして構造化する必要があります。具体的には、ベッド回転率と在院日数の最適化による病床のフル活用、介護施設を対象とした自院救急の充実による新入院獲得、健診センターの活性化による地域住民の方々の取り込み、治験・臨床研究を通じた新しい治療・創薬への貢献、そして学校法人徳洲会の規模拡大による人材育成という5つの柱を掲げ、徳洲会の未来像を提示します。

各施策から生まれたノウハウ 再び現場に還元することが要

①ベッド回転率と在院日数の最適化：病院経営の基盤は、限られた経営資源である「病床」の最大活用にあります。急性期病院におけるベッド回転率の向上と平均在院日数の最適化は、急性期医療のニーズに迅速に応えるための必須条件です。ベッド回転率2.5、在院日数11～12をクリアすべき指標として徳洲会は設定しています。医師、看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカーなどが早期から連携し、入院初期から退院支援を見据えたプロセスを構築、標準化された治療スケジュールを再度見直し、無駄な滞留を防ぐことで、患者さんの早期回復とスムーズな在宅・施設への移行を促します。グループ病院との地域連携も強化、後方支援病院や訪問看護ステーションとの情報共有を密にし、ボトルネックの解消に努めることも欠かせません。病床を「使い切る」とは、最適な医療を適切な期間で提供し、常に本当に医療を必要とする急患を受け入れられる体制を維持することを意味しているのです。

②介護施設を対象とした自院救急の充実：高齢化社会の進展にともない、老健や有料老人ホーム、グループホームといった介護施設からの救急搬送ニーズは年々高まっています。これらを自院の救急ネットワークに組み込むことは、地域包括ケアシステムを有効に機能させることにつながり、介護施設特有の現場の不安を軽減することにもなります。グループ内の介護施設はもとより、周辺の施設との間にもホットラインを整備します。これは救急初期対応の迅速化を意味し、病態の重篤化を防ぐことになります。

③健診センターの活性化：「治療する医療」から「予防する医療」へのシフトが叫ばれる中、健診センターの役割はますます重要性を増しています。予防医療の充実は、健康寿命の延伸に寄与するだけではありません。未病への取り組みこそ、地域の方々と病院をつなぐ強い導線になります。最新鋭の検査機器と独自の徳洲会デジタルシステムにより、受診環境を刷新します。「見つけて終わり」にしない健診。異常が見つかった際、スムーズに院内の専門外来へつなぐシステムを構築し、早期発見・早期治療の網の目を密にします。地域の企業や自治体とタイアップした生活習慣病予防プログラムを、ぜひ各病院で展開してください。働く世代の健康を守るパートナーとして、徳洲会ブランドを確立できるはずです。健診センターを地域の健康ステーションとして機能させましょう。

④治験・臨床研究への注力：徳洲会グループが有する1,700万人に及ぶ臨床ビッグデータは、治験や臨床研究において世界トップクラスのポテンシャルを秘めています。これを活用し新しい治療や創薬に挑戦します。これには治験実施体制を強化し、製薬企業からの受託治験をスムーズに遂行できる環境を整えなければなりません。臨床研究を奨励し、新しい治療法の確立やアンメット・メディカル・ニーズへの挑戦をバックアップする方針です。

⑤学校法人徳洲会の規模拡大：学校法人の規模拡大と教育力の強化は、“生命だけは平等だ”の精神を次世代に継承する重要な手段です。徳洲会独自の奨学金制度を活用し、未来を担う人材を養成していきます。

現状に甘んじることなく常に 変化・進化を求め挑戦を続行

「ベッド回転率と在院日数の最適化」、「介護施設を対象とした自院救急の充実」、「健診センターの活性化」、「治験・臨床研究への注力」、「学校法人徳洲会の規模拡大」は、それぞれが独立した施策ではありません。全プロセスが有機的に連携し、そこで生まれるKnow-howが再び現場に還元される――この循環こそが、徳洲会を新たなステージへと押し上げる鍵です。現状に甘んじることなく、常に変化・進化を求め挑戦を続けることで、徳洲会の未来は輝かしいものになると確信しています。皆で頑張りましょう。

さいたま記念病院＆羽生病院
「救急医療功労者等知事表彰」受彰
急患受け入れ率の向上など高く評価

さいたま記念病院と羽生総合病院（埼玉県）は「令和8年度救急医療功労者等知事表彰」を受けた。県内に約150施設ある救急受け入れ病院のうち、今回は5施設が受彰。9月4日に埼玉県知事公館で受彰式が開かれ、さいたま記念病院の石川進院長と羽生病院の打川幸夫・事務責任者が出席した。



「さらに体制を整えて地域に貢献します」と石川院長（左）



「患者さんを断らずに受けます」と打川・事務責任者（左）

冒頭、大野元裕・埼玉県知事が受彰者に向けて「地域の医療機関による救急患者さんの受け入れ拡大などの取り組みを通じ、埼玉県の救急行政は大きく進展してきました。これまでのご苦労、ご功績のおかげで、多くの県民が安心と安全を享受しています」と挨拶。県内では高齢化の進展にともない、救急搬送件数が増加傾向にあり、地域医療を支える医療機関の現場対応力と確実な連携体制の構築が重要視されている。

さいたま記念病院は昨年度、過去3年と比較して救急患者さんの受け入れ率を大幅に向上させるなど、地域医療の確保に大きく貢献したことが評価された。

石川院長は「徳洲会グループ病院となってから職員の意識が変わり、救急を受け入れる体制が整いました。消防署回りを行うなど積極的に取り組んだ成果であり、今後もさらに体制を整えていきます。当院の本気を見せ、地域に貢献していきたいです」と意欲的。

羽生病院も同様に、救急患者さんの受け入れ率が向上し、県平均を大きく上回る高い水準を維持していることなどが評価された。

打川・事務責任者は「断らずに受けるという院長の方針徹底や、自院救急の活用が評価されたことは大変喜ばしく思います。地域医療のなかに当院がしっかり組み込まれているため、どれだけ貢献できるかを日頃から病院全体で考えています。これからも病院一丸となって取り組んでいきます」とさらなる飛躍を誓った。

救急搬送困難事例の解消に向け、両院が果たす役割と期待は今後ますます高まりそうだ。

イラストレーター北田哲也展
湘南藤沢病院が開催

湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）は9月1～29日、院内で「イラストレーター北田哲也展」を開催している。北田さんは、子ども番組『ポンキッキーズ』のキャラクター「Pちゃん」の生みの親。「病院を元気にしたいと考え、以前から病院で個展を開きたいと希望していました」と明かし、同院に入院中に看護師に提案されたことから実現、「病院が明るくなりました。全国の総合病院にも広まってほしい」と北田さん。

企画に携わった野口彩夏看護師は、北田さんが“緑のパジャマ”を着て“患者さん”になってしまう姿に胸を痛めていた。「闘病中もアーティストでいたいという思いに寄り添いました。今回の個展で、入院中の子どもたちの気持ちが少しでも救われれば」と野口看護師。会場では缶バッジの配布も行い、明るいアートが患者さんや職員の心を温める機会となった。



北田さんを中心に医師や看護師が記念撮影

病気のはなし 236
日頃から乳房の健康を意識
ブレスト・アウェアネス

乳がんは、女性の部位別がん罹患（りかん）者数第1位の疾患で、30代から罹患率が上昇し、40代以降に多く見られるのが特徴。早期発見の予後は良好なため、乳がん検診は、40歳以上の女性では2年に1回無料で受けることができる。しかし、実際に罹患率が上がる20代後半から乳房の健康を意識するのが望ましく、40歳以上でも、2年に1度の検診の合間に乳がんを発症するケースもあることから、「乳がん検診とあわせて大切なのが、乳房の健康を意識して生活する『ブレスト・アウェアネス』の考え方です」と、乳がん看護認定看護師の資格をもつ和泉市立総合医療センター（大阪府）の白井雅美・看護副主任は強調する。

具体的には、「日頃から、お風呂や着替えの際などに乳房を見たり触れたりしながら、ふだんの状態を知り、しこり、乳頭からの分泌物、皮膚のへこみ、乳頭のただれや陥没など、“いつもと違う変化”がないか意識することです」と白井副主任。もし異変があれば、「すぐに乳腺外科を受診してほしい」と訴えている。

一方で、「異変があったり、検診で要精密検査と言われたりしても、イコールがんではありません」とも指摘。乳がん検診受診者1万人のうち、要精密検査となり実際に検査を受けた407人中、乳がんと診断されたのは24人だったとの報告もあり、過度に不安に思わず検査を受けてほしいと呼びかけている。



第34回長崎救急医学会学術集会

「断らない」救急医療がテーマ

大会長に鬼塚・長崎北病院院長

第34回長崎救急医学会学術集会が9月5日、長崎県で開かれ、長崎北徳洲会病院の鬼塚正成院長が大会長を務めた。テーマは「『断らない』救急医療を目指して」。会場には186人の医療関係者らが参集。徳洲会ブースを設け、グループの概要やNPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）の活動を紹介する大型パネルを展示した。


「救急は地域一丸となり取り組むべきです」と鬼塚院長


野中副院長は応需率増加に向けたアプローチを報告


徳洲会グループとTMATを紹介する大型パネルを展示

演題数は過去最多の43演題

鬼塚院長は開会挨拶で「本学術集会の演題数は43演題と過去最多となり、スタートを例年より1時間早めました。テーマを『目指して』という柔らかい表現にしていますが、地域一丸となって取り組むべき内容だと考えます」と呼びかけた。

一般演題では、同院の野中孝一副院長が「当院における救急車受入件数と応需率の増加に向けたアプローチと実践」と題し発表。過去の救急断り理由を分析した結果、専門外、多忙、満床の3つがボトルネックであったと指摘した。

これに対し、従来のひとりの医師が初診から入院まで担う体制から、午前中にトリアージ（緊急度・重症度分類）医を置く分業制への移行や、早朝当番の設置、各診療科専門医の段階的な拡充、病床機能の変更などの改善策を説明。さらに、毎朝の新患カンファレンスや週1回の救急搬送検討会を通じて課題の検証を継続した結果、年間の救急受入件数は1,147件（2021年4月～22年3月）から1,682件（25年7月～26年6月）に増加し、応需率も83.6%から92.4%へ向上した実績を報告した（26年7月の実績は98%）。

特別講演では、長郷国彦・豊玉診療所所長（前・JCHO諫早総合病院院長）が「『断らない』救急医療を目指して」と題し講演。救急告示病院の経営課題として、24時間体制の維持にともなう人件費や労力の負担、高コストに対して診療報酬が追いつかない現状を挙げた。

そのうえで、持続可能な救急医療には自院の努力だけでなく、地域の病院間での役割分担や行政からの財政支援、地域全体での連携体制の構築が不可欠と強調。また、改定された診療報酬制度の活用や、救急受け入れを支える出口戦略の重要性を説き、病院経営と救急医療の両立に向けた具体的な姿勢を示した。

同学術集会を終え鬼塚院長は、「大会長を担うにあたり、徳洲会グループの理念に通じる『断らない救急』以外のテーマは考えられませんでした。特別講演では、断らない救急医療から病院経営に至るまで、まさに語ってほしいと考えていた視野の広い内容を講演していただき、感謝しています」と強調。

さらに、「長崎県の離島からの発表も含め多様な演題が集まり、多職種が活発に議論できる貴重な機会となりました。実行委員やスタッフのマンパワーを結集し、無事に順調な運営ができたことに感謝しています。今回得た学びを今後の医療・介護の現場や職員教育にも還元していきたいです」と手応えを示していた。

特養 逗子杜の郷

入居者さんQOL向上へ 5年ぶりに家族会を開催


和やかな雰囲気で進む家族会の様子

特別養護老人ホーム逗子杜の郷（神奈川県）は8月27日、施設内で5年ぶりに家族会を開いた。入居者さんの家族と職員が交流し、情報共有や入居者さんのQOL（生活の質）向上を目指すのが目的。新型コロナ禍で見送られていたが、感染対策を考慮しつつ再開した。

第1部では、職員らによる自己紹介の後、「ダイバージョナルセラピー（DT）」をテーマにプレゼンテーションを実施。単なるレクリエーションにとどまらず、入居者さんの趣味や個性を尊重した生活を支える取り組みであることを強調した。

第2部の意見交換会では、参加した家族から、施設利用に至る経緯やケアに関する要望など多様な意見が飛び交った。参加者のひとりは「いろいろな方の事情を聞けて参考になりました。看取りの瞬間をどう迎えるか、家族としてしっかり考えなければいけないと感じました」と、久しぶりの家族会に満足した様子だった。

田邉笑美子施設長は「一人ひとりのご家族のエピソードが聞けて本当に良かったです」と振り返り、会話の機会を設ける重要性を再確認。「入居者さんの笑顔は、かけがえのない宝物。その笑顔を絶やさないためにも、職員とご家族で協力していきたい」と意欲を見せた。

葉山ハートセンター

MC協議会加入で連携強化 救急救命士の実習スタート

葉山ハートセンター（神奈川県）は、三浦半島地区メディカルコントロール協議会（MC協議会）に加入、取り組みを活発化させている。メディカルコントロールとは、救急現場から医療機関への搬送過程で、医師が救急隊員へ指示や指導、応急処置の事後検証を行い、救急医療の質を医学的側面から保証する仕組みをいう。MC協議会は、地域の消防機関と医療機関が緊密に連携し、救急搬送体制や医療体制の向上を図るのが目的。


救急救命士が救急外来で病院実習を実施

飯田浩司院長は「当院が逗子・葉山地区の救急搬送患者さんの多くを受け入れている実績から加入することとなりました。消防本部と病院が連携し、地域の救急医療を支えていくことが重要です」と力を込める。

同院では5月17日から、救急救命士の病院実習の受け入れをスタート。来年2月までに逗子市消防本部から20人、葉山町消防本部から14人を受け入れる計画で、現在、週に1～2人が実習を行っている。同実習では、救急外来での研修を通じて、知識や技術の維持・向上を図る。同時に、救急救命士に対する特定の医療処置に関する指示や助言体制も整えている。

「気管挿管やアナフィラキシーに対するアドレナリン投与など、現場からの電話による指示要請に的確に応えることも、医療機関の重要な役割。救急救命士の再教育を支援し、実習の場を提供することで、地域医療に貢献したいです」と飯田院長。

また、7月14日には院内で症例検討会を開催。地域の消防本部所属の救急救命士や周辺の医療関係者など約40人が参加した。心肺停止状態から適切な処置で救命に至った事例などを共有し、病院と消防の緊密な連携の重要性を確認。飯田院長は「救命の現場では、初期対応から病院への引き継ぎまでの流れがスムーズであるほど救命率が高まります。今後も関係機関と手を取り合い、地域の方々の命を守る救急医療体制の充実に尽力していきます」と意欲的だ。

徳之島病院が「24時間テレビ」で紹介

台風でも安全な分娩体制に大反響！

徳之島徳洲会病院（鹿児島県）は、テレビ番組『24時間テレビ49わたしの家族の話～あなたは誰を想う？～』（8月29～30日、日本テレビ系列）で紹介された。「徳之島 離島の出産」と題する企画。「子宝の島」と呼ばれる徳之島ならではの家族のあり方を交えながら、同院で出産する様子が放映された。


「出産を考えている方は安心して来てください」と宮﨑部長（前列左）


暴風雨を受け流す楕円形の構造を採用した徳之島病院

取材を受けた当時、台風の直撃で島の広範囲が停電となったが、同院は非常電源に切り替え対応。スタッフのサポートの下、無事に出産した。放送後、厳しい環境ながらも安心してお産ができる同院の体制は、島内外で大きな反響を呼んだ。同院の宮﨑のどか産婦人科部長は「島全体で子どもを育てる“結の心”が息づいています。離島での出産に興味のある方も、安心して来てほしいです」と笑顔。

同院は島唯一の分娩施設で、昨年10月に新築移転し、津波被害を受けにくい高台に立地するとともに、暴風雨を受け流す楕円形の構造を採用した。非常用電源設備も強化し、台風による停電時も分娩を含む全診療科で安定した医療を提供できるようにするなどし、リニューアルを果たした。

産婦人科は常勤医とグループ内外からのサポート医師により、ほぼ2人体制を構築。緊急帝王切開にも院内で対応し、血液製剤の不足に備え、事前に感染症検査をすませた職員から採血・輸血する体制も整えている。ハイリスク妊娠は早期に鹿児島本土などの専門病院を紹介し、緊急時はヘリコプターで島外へ搬送するが、できる限り島内で対応する同院の姿勢が“子宝の島”を支えている。

大崎病院 東京ハートセンター

米国医師視察団受け入れ

吸着型血液浄化療法を見学

大崎病院 東京ハートセンターは9月3日、米国から医師団の視察を受け入れた。同センターが取り組んでいる包括的高度慢性下肢虚血（CLTI）に対する吸着型血液浄化療法を見学し、臨床知見を得ることを目的に来院した。

CLTIは下肢動脈疾患（LEAD）が重症化し、難治性下肢潰瘍などをともなう病態で、下肢切断が必要となるケースもある。CLTIに対しては、血液中のLDLコレステロールやフィブリノーゲンを取り除いて末梢血液循環を改善し、難治性潰瘍の治療を目指す日本発の吸着型血液浄化療法（2021年3月に保険収載）がある。同センターの山内靖隆副院長が多数の症例を手がけてきたことから、今回の視察対象に選ばれた。

カリフォルニア大学サンフランシスコ校やメイヨー・クリニックなどから5人の教授が訪問。同療法が未承認である米国では、下肢切断回避に有用な治療法へのニーズが強く、情報収集のために視察先を探していた。

視察団の到着後、ふたりの患者さんの協力を得て、透析室で実際に吸着型血液浄化療法を行う様子を視察団が見学した。同療法は血液浄化装置の回路内に専用のカラム（筒状の吸着器）を組み込んで行う。山内副院長は同療法の仕組みや適応、治療の流れなどを説明した。

治療見学後は、山内副院長がこれまでに手がけてきた症例をもとに、血行再建術や吸着型血液浄化療法による CLTI 治療の取り組み・治療成績など紹介。質疑応答では、視察団から同療法の治療効果の評価方法や適応などについて質問が相次ぎ、山内副院長が一つひとつ丁寧に答えた。


視察団にCLTIへの吸着型血液浄化療法を説明する山内副院長（左）

山内副院長は「CLTI治療は国内では20年ほど前から本格化し、これまで日々進歩してきました。そうしたなかで登場した日本発の治療法が、ひとりでも多くの患者さんの救肢につながり、今回の視察の成果が全世界の医療の向上につながればうれしいです」と期待を寄せている。

介護 & 解語 ―施設からお答えします― 27

サービス調整する居宅介護支援

“ときどき入院、ほぼ在宅”というスローガンの下、国が推進しているのが、高齢者の方々が要介護となっても住み慣れた地域で自分らしい生活を最期まで続けられるよう支援する「地域包括ケアシステム」です。その一角を担う居宅介護支援事業所には、在宅生活を支える各種サービスを調整し、ケアプランを作成する重要な役割があります。山形徳洲会病院に併設する同事業所、山形徳洲会介護センターの小松慶多センター長（主任介護支援専門員、介護福祉士）が解説します。



小松慶多・山形徳洲会介護センター長（主任介護支援専門員）



ケアプランの作成に向けて患者さんの主治医（松田憲一朗・山形徳洲会病院脳神経外科部長［右］）から意見を聞く小松センター長（中央）

病院併設の居宅介護支援事業所では、主に外来通院する高齢者さんや、退院を迎えた高齢者さんのうち、介護が必要となった方々に対して、在宅生活を続けられるようサポートします。

たとえば外来通院のケースでは、加齢による体力低下や歩行の不安定、お薬の適切な服用が困難な場合などに、できる限りその時点の生活スタイルを継続していけるよう、通所リハビリテーションや訪問看護などの提供事業者を紹介します。退院時のケースでは、ご自宅の環境に応じ介護用ベッドや手すりの設置など提案します。自宅での入浴が困難な場合は訪問介護や通所リハビリを検討します。それぞれのケースで要介護認定の申請（新規・更新）代行も行います。

これらの介護保険サービスや、場合により介護保険以外のサービスも提供するために、居宅介護支援事業所に在籍する介護支援専門員（ケアマネジャー）が作成するのがケアプラン（居宅サービス計画書）です。

ケアプラン作成のため、ケアマネジャーは、ご本人やご家族との面談を通じて、解決すべき課題を分析するアセスメント（評価）を行います。アセスメントの結果やご本人・ご家族の意向を考慮し、必要なサービスを組み合わせたケアプランを作成します。ケアマネジャーがサービス事業者を集め、サービス担当者会議を開催後、サービスの提供を開始します。ケアマネジャーは定期的（1カ月に1回）に居宅を訪問してモニタリングを行い、ケアプランの実施状況を把握、必要に応じてケアプランを変更します。

ICTで効率化しきめ細かい対応 質向上に努め選ばれる事業所へ

山形徳洲会介護センターは利用者さんとご家族の希望を重視するとともに、アセスメントを的確に行い、安心して在宅生活を送れるよう、適切なサービスが多様な事業者から提供されるよう配慮しています。

時にはご本人・ご家族の間で意向が異なる場合もあります。たとえば、退院時に歩行に不安があり認知機能の低下も見られたケースでは、ご本人は自宅に戻ることを希望し、ご家族は在宅生活に不安を感じていました。そこで訪問介護、通所介護を利用しつつレスパイト（介護者の休息）でショートステイを時々利用するプランを作成。ご家族の不安を軽減しながら、ご本人の希望どおり在宅生活を送ることができました。

在宅生活の継続には、介護保険サービスだけでなく医療との連携など総合的な支援が必要で、きめ細かい対応が求められます。そのため当事業所はICT（情報通信技術）化を推進し業務効率化に取り組んでいます。

支援経過記録の音声入力や会議記録のAI（人工知能）要約、各種書類のクラウド管理、職員間の連絡ツール、職員相互のスケジュール・業務進捗の共有化などです。ご家族の都合に合わせサービス担当者会議のオンライン開催にも対応しています。

病院内に併設する訪問リハビリや通所リハビリへの紹介、在宅で生活している方が体調を崩された場合の受診や入院を含めての相談など、多職種連携も図っており、居宅介護支援事業所の果たす役割は非常に大きく、院内の収益にも貢献を果たしています。今後もケアマネジャー業務の質向上に努め、“選ばれる事業所”を目指します。

おくすりレクチャー

サプリメントや健康食品

手術前にすべて申告を



細野真吾
大垣徳洲会病院
薬剤部 係長

服用している薬剤などについて、お尋ねする際、つい「これくらい言わなくてもいいか」と回答を忘れられがちなのが、サプリメントや健康食品です。その種類は多く、代表的なビタミン剤だけでなく、ニンニクやショウガのエキスを固めた錠剤、プロテイン（タンパク質）などさまざまで、なかには「これはサプリだと思わなかった」という方もおられます。

しかし、最近のサプリは効きが結構良く、そのぶん副反応も強くなりますので、とくに術前は正確な申告が大切です。たとえば抗酸化作用をうたうビタミンEやDHA、EPA、ひざの痛みを和らげる効果を期待するコンドロイチンやグルコサミンは血液サラサラ効果（血小板凝集能の抑制）がある反面、出血を助長します。プロテインは普通の人が飲むぶんには問題なくても、腎機能の悪い方が飲むと、さらに腎機能が悪化する懸念があります。

こうした事前情報があると、場合によっては安全のため治療法や使用する薬剤を変えることもありますし、念のため術前2週間前には服用を中止するよう、お願いすることもあります。ハーブティーや薬膳スープなど、どこまで伝えればいいのかと悩むこともあると思いますが、とりあえず申告していただければ、医師、薬剤師が安全に問題ないか、お調べしますので、まずは正確な申告にご協力をよろしくお願いします。

看護のチカラ

現場の〝心〟に寄り添った感染管理 多職種連携で守る患者さんと職員

Vol. 7



前田久美子
葉山ハートセンター（神奈川県）
看護主任（感染管理認定看護師）

葉山ハートセンター（神奈川県）の前田久美子・看護主任（感染管理認定看護師）は、感染対策向上加算1の算定を機に、6月から専従として院内の感染対策に尽力している。現場看護師としての経験を生かしながら、多職種と連携を図り、職員と患者さんの双方を守る体制づくりに邁進する日々だ。



ICTラウンドでは良い取り組みを評価するよう心がける

2018年、前田・看護主任は当時の看護部長の勧めや子どもの進学といったタイミングが重なり、感染管理認定看護師教育課程に通い始めた。もとより熱傷センター勤務の経験から創傷や感染への関心が高く、学びを深める絶好の機会と捉えた。18年冬に同校を卒業後、20年5月の認定試験に見事合格した。

試験直前の20年2月、同院はダイヤモンド・プリンセス号での新型コロナウイルス対応にあたることになる。感染防止対策委員会の副委員長を担っていた前田・看護主任は、ICT（感染制御チーム）の看護師として現場に立ち、グループ内外の支援を受けながら対応に奔走。試練の時期を乗り越え、病棟勤務との兼務での活動を経て、今年6月には感染対策向上加算1の専従看護師となった。

専従化にともない、抗菌薬適正使用支援チーム（AST）の活動など多職種との調整業務が増加。薬剤科、検査科、医師を巻き込む調整は大変だが、小規模病院だからこそ顔の見える関係性を強みに、風通しの良い環境を生かした多職種連携を模索し続けている。前田・看護主任は「ICTラウンドで『チェックマンが来た』と言われることもありますが、良い取り組みを評価し、データで伝えるよう意識しています」と強調する。

兼務時代に現場の多忙さ、病棟看護師の不足といった課題を、身をもって知っているからこそ、一方的な指導ではなく職員の意見に耳を傾ける姿勢を大切にしている。また、コロナ禍を経て面会制限の解除を進める際にも、職員の感染予防意識を配慮しながら丁寧に説明を重ねた。

病棟巡回時には、患者さんや家族とも会話を交わし、感染対策や防護具着用についての不安を和らげるコミュニケーションにも心を配っているが、患者さんと職員の安全を守る環境づくりの推進が、現在のやりがいだ。

今後は自身の活動を通じて認定看護師の存在感を高め、次代を担う後進の育成にも意欲を見せる。すでに感染管理を目指す看護師のサポートにも着手しており、前田・看護主任は「職員の声を拾い上げながら、一緒にできる対策を考えていきたいです」と意欲的だ。



感染対策をテーマに医療講演で講師を務める前田・看護主任

この医療機器ってなあに？

テーマ サイバーナイフ



精密な放射線治療を実現

サイバーナイフは、がんなど病変をピンポイントで狙い撃ちする放射線治療装置です。放射線を出す部分がロボットアームの先端にあり、ロボット側が向きを変えながら、さまざまな方向から約100本の極細エックス線ビームを病変に集中させることで、精密な照射が可能です。

さらに、体のわずかな動きをリアルタイムで感知し、病変を追尾しながら照射を続けるため、呼吸で病変の位置が変わる肺がんや肝がんにも対応できます。照射中に痛みや熱さは感じません。治療は1回当たり30分前後、1～5回程度で終わります。高齢の方でも負担が少なく、痛みを和らげる緩和照射など生活の質（QOL）向上にも役立つ幅広い患者さんに適した治療です。当院では、サイバーナイフと広い範囲の照射に適したトモセラピーを使い分け、患者さん一人ひとりに合った放射線治療を提供しています。少しでも気になることがあれば、まずは主治医の先生にご相談ください。



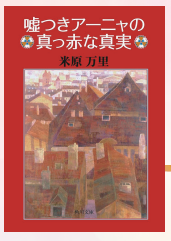
飯田 洋介
南部徳洲会病院（沖縄県）放射線部主任（医学物理士）

私の推し本

20年以上前、母と一緒にテレビのトーク番組を見ていた時、出演していた著者の米原万里さんが語る本書のエピソードがとても面白く、母が知人から借りて私にも読ませてくれた一冊です。

東西冷戦下の1960年代、チェコスロバキア（当時）のプラハにある学校で少女時代を過ごした著者が、各国から集まった同級生のなかでも、とくに親しかった友人3人との日々を振り返るとともに、約30年後、散り散りになった同級生らを訪ね歩くノンフィクションです。世界情勢に翻弄された当時の暮らしや、学生時代にはわからなかった事柄を深堀りし真実を解き明かしていく展開に興奮や感動を覚えました。

人は必ずどこかの「国」に属し、何らかの「母語」をもつ――。当たり前なのに忘れかけてしまう事実に、あらためて気付かされます。「多様性」がうたわれる今、どう付き合い、どう面白さを見つけるかを考えるきっかけになる本です。



『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』
米原万里・著（KADOKAWA刊、836円）



齋藤 崇
札幌もいわ徳洲会病院
医事課職員